

# かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第32号（令和2年8月）

ミドリ「追分おいわけのことが少しずつわかってきたわ。」  
ふみお「青年団せいねんだんで建てた追分の碑いしもあちらこちらにあったね。」  
あゆむ「桑折こさおりの追分おいわけも見たかったな。」  
文じい「ふむ、そのうちに行ってみよう。でも、今日は、鳥居とりいなんじゃ。」  
ミドリ「神社じんじゃの入り口に建っているあの鳥居とりいね。どこの鳥居とりいなの？」  
文じい「ふむ、西郷地区にしごうちくの細谷ほそやじゃ。」  
あゆむ「正面しょうめんにお寺てらが見えてきたぞ。」  
ミドリ「“春光院しゅんこういん”というお寺てらだわ。」  
あゆむ「お、今度は、大きな木だ。」  
ふみお「杉すぎの木だね。」  
文じい「ふむ、このスギは保存樹ほぞんじゅとなっておる。」  
あゆむ「そして、あれが鳥居とりいかな？」  
ミドリ「あ、そうね。大きくて堂々どうどうとしている。」  
ふみお「すごい鳥居とりいだ。石造りいしづくだね。」



鳥居記念碑

## ほそや 細谷

いしづくりおおとりい

# 石造大鳥居

ミドリ「でも、神社なんて見えないわね。どこにあるのかしら？」  
文じい「社殿しゃでんは向こうじゃが、そこに行く前に、この鳥居とりいをもう少し見てみよう。」  
ふみお「手長神社てながしんじやという字まじの周りに絵えが彫えってあるぞ。」  
文じい「よく見えたな。右上には天あまにのぼろうとしている“昇り龍のぼりりゅう”、左下には天あまから地上ちじやうに降りようとしている“下り龍くだりりゅう”じゃ。龍りゅうは、農耕のうこうの神、稲いねに必要な水みづの神かみという意味いみがある。」

あゆむ「上うへの方かたの真まん中ちゆうに字じが彫えられているな。」  
ミドリ「あらそうね。えーと、手〇神社？」  
ふみお「“手長神社てながしんじや”かな？」  
文じい「その通り。」  
あゆむ「手長神社てながしんじやなんて、おもしろそうだな。」

ミドリ「それじゃあ、手長神社てながしんじやがそのような神様かみさまをまつているのかもね。」  
ふみお「下に石碑いしもある。」  
あゆむ「くねくねした字じで、よくわからないな。」  
文じい「“鳥居記念碑とりい”と彫えってある。わきには、

“明治十七歳(年)八月吉日”とある。1884年じゃ。裏には村や人の名が見える。」

ミドリ「でも、うすくて見えにくいわ。」

文じい「そうじゃの。しかし、よく見てみると、手傳村名として、永野村から権現堂村まで拾九カ村。それに、宮脇村、棟梁、佐竹寅吉、佐竹庄太郎、石工、森谷善七という名も見える。そして、多くの寄付をしてくれた方々の名前が並んでいるようじゃ。」

あゆむ「それにしても、この鳥居は石だよ。いったいどうやってつくったのかな。」

文じい「ふむ、この鳥居、高さが5.05m、幅が6.09mあるという。それで、徳正栄作さんという方の記録によれば、石工の森谷善七が永野地区の巨大な石から、2年間もかかって切り割りしたということじゃ。」

ミドリ「それを、どうやって運んだのかしら？」

文じい「雪のある時に、唯土機(たんぼぞり)でたくさんの人で運んだということじゃ。」

あゆむ「それで、どうやって建てたの？」

文じい「足場となる舞台のようなものを作って、石を引き上げて組んだらしい。」

ふみお「すごい！鳥居の部分の名前もあるよね。」

文じい「ふむ。まず柱が少し広がって立って、横に貫が通され、上には島木、その上に笠木がついている。字と絵が彫られ掲げられているものが、額束じゃ。よく組んだの。」

あゆむ「ところで、その手長神社というのは？」

文じい「向こうなんじゃが、この大鳥居が一の鳥居で、昔は、この鳥居をくぐって社殿に向かっていく道で、ここからが神社だ。」

ミドリ「あら、矢印で神社案内をしてくれている。」

あゆむ「あ、向こうに赤い鳥居だ！」



ふみお「“村社手長稲荷神社”という石柱だ。」

ミドリ「すごい！いっぱい並んでいるわ。」

ふみお「多くの方が奉納したんだね。」

文じい「さあ、拝殿が見えてきた。手長さまは、長い手によって多くの収穫をする神様。お稲荷さまは、稲作や養蚕、食物の神様。しっかりお参りしよう。」



あゆむ「隣に石碑もあるな。」

ミドリ「“社歴”だって。神社の歴史ね。」

ふみお「享保9年(1724)、細谷村の“一滴”という人が、巡礼で訪れた四国讃岐の中村というところの手長大明神を勧請、つまり、霊を分けてもらい、持ち帰ったという。」

文じい「ほほう、よく読み取れた。明治7年まで春光院の住職が祭ってこられたとある。」

ふみお「そのあと、神官両所家に移ったみたい。」

ミドリ「字は、“両所遊雲”書となっているわ！」

文じい「ふむ、この方は、両所里見先生じゃな。学校の先生で、書道の先生、神官でもあった。このきちんとした字は、まじめな両所先生のお人柄そのものじゃ。」

ふみお「隣には、この碑のために寄付した人の名前、さらに隣には、“狐供養碑”だって。」

あゆむ「お稲荷さんだからだね。」

ふみお「ほかに祠があり、燈籠などもたくさん奉納されている。多くの人々の厚い信仰が続いてきただな。」

ミドリ「石造りの一の鳥居からこの社殿まで、すごく広い神社になるわね。」



社歴碑